

2023 年度 4 月入学 博士後期課程 一般入学試験・国費留学生等入学試験
事前課題

課題文を読んで、2500 字から 3000 字程度で設問に答えなさい。その際、資料や文献を参照し、それらを明記すること。参考文献や引用文献等のリストも上記文字数に含みます。

設問

課題文の論旨を簡潔にまとめなさい。その上で、日本語教育学においてはどのような研究課題となり得るか、そこで得られる研究成果の可能性、および、限界について、根拠を示しながら具体的に述べなさい。

課題文

日常における行為

実践という言葉について語る前に、私たちの行為、行動あるいは活動といわれるものについて触れておこう。もろもろの人間行為は異なった文化の間で、あるいは同じ文化のなかでも差異がみられるだろう。しかし、そうした差異をこえてそれらは慣習的に過去から反復されルーティン化された活動として、日常生活のあらゆる場面に広がっている。

朝、食事をし、電車に乗って職場に行き、同僚と挨拶を交わし、コンピュータに向かって書類を作り、会議で議論を交わし、ひまにまかせてコンピュータ・ゲームをやり、家に帰ってテレビで野球中継を見ながら家族と食事をし、寝る前に風呂に入って歯をみがく、などなど。これらはありきたりの日常的な活動の連鎖である。しかし、日常から切り離された場面でも活動はよどみなくつづく。会社に到着したら友人の訃報に接し、あわてて家にもどって喪服を着て葬儀場にかかけつけ、受付で香典を渡して記帳し、故人の家族や参列者とともに死者を悼み、首をうなだれて僧の読経を聞き、帰途には久しぶりに出会った友人たちと飲み屋ですぐす、などなど。

これらの活動の一こまにフォーカスをあててみれば、そこには当事者の欲望や意志、動機が作用し、きわめて複雑な心と身体の働きがあるだろう。朝食を摂るという、たった二十分間をビデオに収めた場合でも、そこには数百単位にのぼる特徴ある身体の動きや発せられた言葉がぎっしりと連鎖しているのを見ておどろくだろう。それらはほとんど無自覚的にくりかえされる習性のような行為であったり、あるいはより意識的に何らかの意図や動機に支えられた行為であったりする。「なぜ歯をみがくの?」と問われれば、「いつもそうしているからだ」と答えるかもしれない。「なぜ葬儀場に行くの?」と問われれば、「友人の葬式に行くためだ」と答えるだろう。

歯みがきは社会的な行為だ

しかし、これらの活動の場面で見落としてならない重要な点は、それらがすべて何らかの形で社会的に構成され、慣習によって支えられていることである。家族で食事することは、場面そのものが家族という社会的な場である。そこに出来る料理、食べ方やエチケット、あるいはそこで交わされる会話や行為は、その家族に特有のものとして慣習化されたものであり、しばしばその社会的な位置をも明瞭に表している。さらに、バスルームにおいて一人で歯をみがく場面さえも、その行為は社会的であらざるをえない。歯みがきの行為は、両親のしつけや学校教育によって慣習として身につけられ、さらに健康管理の商業的な言説やテレビ・コマーシャルによって強化されている。

日常生活に広がるこれらの行為や活動は、自分以外の他者との関係を抜きにしてはありえない。したがって、私たちは自分だけで考え、自分だけで行動しているのではない。理性によって行動する自律した〈近代的主体〉(個人)という考えによっては、私たちの日常生活の大部分を占める行為について説明することができないのである。それらの行為はたんに個人の心のなかに描かれる心理的な表象に由来するものではない。また、社会のなかで共有されている規則、価値や規範

にそって単純に世代から世代へと伝達されていくものでもない。むしろ、それらは権力が作用する社会関係の網の目のなかで形成されてきた慣習によって強く支配されているという側面をもっている。

人類学では、社会的に構成され、慣習的に行われているこのような行為や活動を「実践」(practice)と呼ぶが、それがこの本のテーマである。人類学的な意味での実践という言葉は、人びとの行為とその経験が社会関係と分かちがたく結びついていることを表しており、その意味で、実践とは〈社会的実践〉にはかならないのである。

日本語の「実践」と人類学という「実践」

このような実践の概念は、英語のプラクティス(practice)、フランス語のプラチック(pratique)、ドイツ語のプラクシス(praxis)などの語が含まれている「慣習的行為」という意味に近いだろう。しかし、一般に日本語で「実践」とは、人間個人が自覚的に明確な意図をもって行う行為を指すことが多い。この意味での実践は、古代ギリシャの〈プラークシス〉(praxis)に由来する。

プラークシスとは、ボリスの自由な市民が言説を提起し、たがいの討議をもって行う公共的、政治的な活動を意味している。それは労働や仕事から解放された者だけに許された知的な活動であった。ところが、十九世紀のマルクスにおいては、人間が労働によって外的な自然環境を改変しモノを生産していく対象化行為、さらに世界の変革に向けた「革命の実践」こそが、プラークシスの本来的な営みとして強調されるようになる。

今日では、「政治的实践」や「学問的实践」という言葉が示すように、より自覚的な決断と反省的思考をそなえた実践の営みを表すことも多い。いずれにしろ、日本語の実践はプラークシスに由来する行為や活動を指す傾向が強く、日常の慣習的行為という意味は希薄であるかもしれない。しかし、人類学という実践概念においては、それらの古典的あるいは現代的なプラークシスの意味はかならずしも排除されない。むしろ、人類学ではそうした自覚的あるいは意図的な行為さえも、社会的に構成される慣習的な実践と接合していることを明らかにしようとするからである。つまり、私たちはいかに自覚的に明確な目的をもって何ごとかを行い、それが創造的な行為であり、新しい世界を開くものであったとしても、そもそもの社会的な構成と慣習の圏域から出発せざるをえないのである。

私たちは知識を生きている―実践知

では、私たち、あるいは彼らは自分たちの行っている実践について、何を知っているのだろうか？ これは知に関する古くからの哲学的問いであるとともに、人類学的な問いでもある。たとえば、占い師の占いに注目してみよう。占い師は宇宙と人間の関係を示すようなコスモロジー(たとえば十干十二支や占星術)に従ってクライアントの運命について判断を示す、と一部の人類学者たちは考える。すなわち、コスモロジーはいわば文法テキストのようなもので、そこにふくまれる知識、使い方、慣用などに従って判断をくだすということになる。

その場合、占い師はコスモロジーの知識を十分に理解し、その使用法を獲得しているから、そ

これらの規則を活用して判断を導くことができるということになる。この見方に立つならば、占いはコスモロジーという外在する知とその規則に従って占いを実践することになる。つまり、占いは知的資源を駆使する操縦士なのである。

しかし、占いは知識やその用法を理解しているのではなく、むしろそうした規則の視点に立つことなく、ただ彼が占い師グループのなかで体得してきたやり方によって占っているだけだと考えることもできる。この考えによれば、占いはその理由を説明することができないような、つまり対象化することが不可能な、占い師としての慣習に従って実践しているだけのことである。

占いはコスモロジーという知的資源を使っているように見えるが、それが直接に彼の占いという実践を生みだしているのではない。それは単純な分類図式によって成りたつ、そこにおかれた占い道具にすぎない。占いの判断はそうしたすべての人びとに適用可能な単純な道具をやりくりし、クライアントの特性にあてはめることによって導きだされる。そこに占い特有のある種の神秘的な効果が生みだされるのである。

人類学では、前者のような見方を〈主知主義〉と呼ぶ。外在する知とその規則が占い師の実践を規定していると考えからである。反対に、後者の見方は知が実践そのものに内在しており、占いはそうするように慣習のなかで訓練されてきたことを強調する。知識は本に書かれたようなモノではなく生きた身体に宿っている。このように実践の外部ではなく実践そのものに内在する知を、この本では実践的な知識、すなわち〈実践知〉と呼んでおこう。私たちの日常生活のあらゆる場面で働いているのは、この実践知にはかならない。私たちは知識を操作しているのではなく知識を生きているのである。